

西田幾多郎とルター ——死の自覚から自由の可能性へ——

石 井 砂母亜*

抄 録

己事究明を哲学の根本問題と考えた西田にとって、宗教論は哲学の中心課題であった。1935年以降、西田は宗教論を練り上げるに際し、ルターを批判的対話の相手として重視するようになる。ルターへの関心の深まりと、西田自身の宗教論の深化とは、不可分の関係にある。しかし、これまで西田のルターに対する関わりの詳細については十分な研究がなされてこなかった。本稿では、その空隙を埋めるために、西田哲学におけるルター受容の内実を資料研究の視点から明らかにしたいと思う。これによって、西田がルターとの対話を通して死の問題を追求したこと、またルターの終末論を死の自覚の視点から解釈することによって人間の自由の可能性を問い求めようとしたこと、このことを示すことが本稿の最終的な狙いである。

Keywords: 西田哲学, ルター, 熊野義孝, 死の自覚, 自由

はじめに

西田幾多郎(1870-1945)は、処女作『善の研究』(1911)で宗教を「哲学の終結」(1-3¹)と語り、遺稿論文「場所的論理と宗教的世界観」(1945)では宗教的世界観を主題的に論じた。西田哲学の中心に宗教の問題が横たわっていることは明らか

であるが、それは西田が哲学の特殊テーマとして宗教に関心を寄せ続けたということ以上の意味をもつ。「道德の立場からは、自己の存在と云ふことは問題とならない」(11-393)と語る西田において、宗教とは自己の存在を問うものであり、西田の宗教への語りは、自己の存在を問うる実在の論理構造を探求する哲学課題と一つに結びついてきた。従って、西田の宗教論を問題にすることは西田哲学の根本問題に肉薄することでもある。

本稿では、以上の問題意識のもとに、西田のルターへの問題関心の深まりが同時に西田哲学の発

* Ishii, Samoa
跡見学園中学校高等学校
ルーテル学院大学非常勤講師

展と呼応している点を確認したい。西田がルターについて哲学的な思索を行うのは1935年以降の限られた諸論文においてであるが、「場所的論理と宗教的世界観」を含めいずれも西田の宗教論を理解する上で重要論文として位置づけられるものである。西田はそこでルターを執拗に引用し、神の愛に貫かれた人間の自由を問題にしている。最晩年論文に結実する後期西田の宗教論を解明するためには、西田哲学におけるルター受容の経緯を追跡する必要があるが、西田哲学におけるルター受容ということに関して正面から問題とする研究はこれまでほとんどなかったように思われる²。本稿では、それゆえ、ルター神学の西田哲学への影響を内在的に追う前に、まずは西田哲学におけるルター受容を資料研究という観点から進めていき、西田のルター神学への関心の中心を明らかにしたい。

1. 『善の研究』以前のルターへの言及

現存する資料の中で西田が最初にルターに言及するのは、親友である金田良吉³（以下、山本良吉）に宛てた書簡の中である。1889年3月13日、西田はナポレオンやニュートンの名前を挙げながら、学問に没頭するあまり身体を壊した友に対して「夭死致し候は、何の楽か御座候へき……嗚呼君少しく顧慮せよ 願くは余をしてLutherたらしむなかれ」（新19-8f.）と語っている。ルターの修道院入会を決定づけるのは落雷体験や学友の急死に見る死の問題⁴であり、10代の西田がこうしたルターの生涯を押さえていたことが伺える。ついで西田がルターに言及するのは1895年10月2日山本良吉宛書簡、教育者として活躍する友人の成功を願う文面においてである。「僧徒を改革するも我国の為めなれとも今の僧徒を改革するは容易の業にあらず 勞して功少なるへし とてもルーテルの熱心無くしてはできぬ事ならん 僧徒などは後にし先づ我国教育の中心に入り教育の改善のことに尽力あらんこと望ましく存し候」（新19-36）。

徳善義和は日本におけるルター受容の歴史を、

宗教改革400年とルター没後400年を基軸に、第一期を1916年以前、第二期を1917年から1945年、第三期を1946年以降と三期に分け、第一期のルター受容を「歴史上の偉人、英雄として」の受容としている⁵。確かに西田のルターへの発言は偉人や英雄の域から出るものではなく、西田においてルターが権力に立ち向かう改革者、偉人として受け止められていたことが分かる。西田がどのようにルターを知ったのかは定かではないが、徳善は中村正直が「ルターの名をいち早くこの国に紹介した一人であった」とし、少年向け読物（1874）でルターを紹介し、『同人社文学雑誌⁶』第4号（1876）でルター伝を公にしていると平林広人の論文から引いている⁷。これ以降も加藤寛や村田勤によりルター紹介がなされており、哲学や宗教思想に関心のある若者であればルターに触れる素地は整っていたと考えられる。とはいえ、西田の書簡や日記には中村、加藤、村田の名は見られず、教育の過程でいつの間にか知り得たとも言えよう⁸。平林広人は、中村正直のルター伝の賛が「明治大正時代の漢文教科書に抜粋されていて多くの中学生によって愛読されていた」⁹と述べており、西田がこの漢文教科書を読んでいた可能性はある。

最初の書簡は、大日本帝国憲法発布に対して山本良吉ら学友と共に「頂天立地自由人」という言葉を掲げて明治政府と四高を批判したその一ヶ月後にあたり、それは山本が官営化する四高に失望して退学した時期とも重なる。先の書簡は権力に抗い争う自らをルターになぞらえたものと見ることができよう。また1895年の書簡も、四高を中途退学し東京帝国大学に選科生として入学せざるを得なかった西田が、不遇のままに石川県尋常中学校七尾分校に赴任した時期と重なる。この時期の西田の書簡を見ると、立身出世の絶たれた現実に喘ぐ様が見てとれ、こうした文脈でルターに関心が向かっていったと考えられる。

2. 『善の研究』前後と京大時代のルターへの言及

1) 『善の研究』前後のルターへの言及

石川県尋常中学校での生活はわずか一年、翌年1896年には母校である四高の講師となる。その後、1899年までは四高での突然の罷免、山口高等学校への赴任、四高の教授への転任と西田にとって波乱の時代が続くが、1899年以降は安定した職を得て自らの研究に果敢に取り組むことになる。

西田は、1896年頃の論考でルターを倫理学史の文脈から論ずる¹⁰が、それ以外は西田の中心課題となる人生の問題¹¹においてルターを取り上げている¹²。特に四高の交友誌『北辰会雑誌』第35号に掲載された「人心の疑惑」(1903)は、西田のルターへの関心がわかるものである。少し長くなるが引用したい。

昔アングロ、サキソンの或る王が暗澹たる冬の日に高僧と人生の話をして居た所へ、忽ち一羽の小鳥が一方の窓より飛び来たりて一方の窓へ逃れ去つた、高僧は之を見て人生も此の如きものだと言つたといふ話¹³がある、生は何処より来り死は何処へ去るのであるか、人は何の為に生き何の為に働き何の為に死するのであるか、これが最大最深なる人心の疑惑である。……釈迦は此の問題の為に王位の貴を捨て骨肉の愛を割いて雪山に6年枯坐したのである、ルーテルは此の問題の為に寺院に閉ち籠つて狂人の如く祈禱したのである……我が所謂人心の疑惑と云ふのは智識的欲求に本づく哲学的問題ではなくて、我等が情意の上に於て天地人生に対する関係を定めんとする実地の要求より来るのである、……生命の問題である」(新11-71ff、下線部引用者)

西田哲学の根本動機が「人生の悲哀」にあった¹⁴ことはよく知られており、遺稿論文でも「死の自覚」がただ一次的に生きる個人を浮き彫りに

すると明示されている¹⁵ (11-393f)。西田が最初に死の問題と向き合うのは、13歳の時の姉の死である¹⁶が、1904年には日露戦争で弟を失い、1907年には娘二人と死別している。西田はこうした死の自覚に照らされる中で、自己の存在と生命の問題を自らの課題として『善の研究』の執筆に臨んでいる。西田はすでにこの時期から、哲学の根本問題に関わる思想家としてルターを見ていたのである。

2) 京大時代のルターへの言及

西田が京都帝国大学に赴任するのは1910年であり、それ以降18年間を京大教授として過ごしている。その間、自ら「悪戦苦闘のドッキュメント」(2-11)と吐露するように、「純粹経験」から「自覚」、「自覚」から「場所」へと大きく自らの思索を展開し、その独自性を強めてゆく。左右田喜一郎が西田の思索を指して「西田哲学」¹⁷と称したのも、この時期の西田の思索に対してである。小川圭治は西田哲学とキリスト教の関係を四期に分け、第一期を『善の研究』(1911)の執筆期¹⁸、第二期を『無の自覚的限定』(1932)から『哲学論文集三』(1939)までと定義している¹⁹が、確かにこの時期の西田の思索はその独自性を強めてゆく一方で、宗教に関して目立った発言は見られない。もちろんその間にもルターに対する言及が途切れる訳ではない。京大時代一貫して西田が担当してきた講義に「哲学概論」がある。西田は講義ノートの中でルターに触れており²⁰、1924年1月27日の日記には「ルーテル全集のことにつき波多野君来訪」(新18-111)とあり、ルターへの関心を継続させていたことは確かである。この時期の西田が新プラトン主義、キリスト教神秘主義に関心を寄せていたことはよく知られているが、1922年8月の講演「エックハルトの神秘説と一燈園生活」では、エックハルトの神理解がプロティノスに遡るものであること、またプロティノスの思想をキリスト教に取り入れた人物としてディオニシオスを挙げ、この流れを汲むものとしてルターに言及している(新13-98)。1928年の

講義ノートでも同様の文脈でルターの名を見ることができ（新 14-257）。

日本におけるルター受容という観点で見れば、西田の京大時代は宗教改革 400 年とルター聖書刊行 400 年と重なり、世界的なルター・ルネッサンスの影響下にあった²¹。日本においても 1917 年は石原謙（1882-1976）が「M. Luther と神秘主義」を、佐藤繁彦（1887-1935）が「ルターの経験と神秘説」を発表し、続く 1919 年には両者の間で激しい論争が交わされた²²。しかし、ルターと西田の関係をみる限り、自らの思想に受肉させる形で西田がルターに関心を寄せたという形跡を見ることはできない。それはこの時期の西田が「純粹経験を唯一の実在としてすべてを説明してみたい」（1-4）、「実在は現実そのまゝのものではない」（1-7）と『善の研究』で告白したように、「現実そのまゝ」なる実在の論理解明に心を砕いていたからと言えよう。西田が自らの哲学的な歩みに区切りをつけるのは、1932 年刊行『無の自覚的限定』である。「『働くものから見るものへ』の後編から『一般者の自覚的体系』を通じて、紆余曲折を極めた私の考は、此書に於て粗笨ながら一先づその終に達したかと思ふ」（6-10）と序にあるとおり、この論文集の前半は中期西田哲学の終着という性格を有しているが、後半はキリスト教との対話の中で、宗教的次元をも内包する実在の論理構造を考究する内容となっている。

3. 1930 年以降のルターへの言及

1) 西田の哲学的関心とルター

旧版西田全集（1965-66）、新版西田全集（2002-2009）いずれにも、1930 年の日記表紙裏には、次のルターの言葉が記されていた、としている。

Als Luthers Töchterchen Magdalene geboren war, sagte Luther, "Ich bin ja fröhlich im Geist, aber nach dem Fleisch bin ich sehr traurig. Ein Wunderding ist's, Wissen daß sie gewiß im Frieden und ihr

wohl ist, und doch noch so traurig sein."（新 18-167）

なぜ西田は日記表紙裏にこの言葉を表記したのか。このドイツ語の文章からすると、ルターは娘の誕生に際して「肉においては喜べぬその心境」を吐露したことになるが、それでは意味が通らない。マグダレーナとは、13 歳で帰天したルターの次女であった。ルターが神のもとに旅立った娘の死を嘆き悲しんだことは、友人に宛てた書簡からも明らかである²³。このような事情が分かれば、文中の「geboren」という語は「gestorben」の誤記と解した方が自然であろう。ルター学者ではない西田が、直接この書簡に目を通したとは考えがたい。そこで「geboren」を「gestorben」に直して web 上で検索してみたところ、マックス・シェーラー『倫理学における形式主義と実質的倫理学』410 頁に、ルターの当該の文章が引用されていることが分かった²⁴。シェーラーはそれをルターの卓上語録からの引用であると明記している²⁵。ちなみに京都大学の西田文庫を調べてみると、シェーラーの同書が所蔵されていることが確認できた²⁶。してみると、日記表紙裏の表記は、シェーラーの同書からの引用を一部誤って書き写したものと考えられるのである。すでに見たように、「死の自覚」により浮き彫りとなる自己存在と生命の問題こそが西田の哲学的課題であり、シェーラーの言葉を通して西田がルターに関心を持ったことは十分に理解できる。西田は同年 8 月 16 日『読売新聞』宗教欄²⁷で「この頃はもう一度ルーテルを読んで見たい考へをもつてゐる」（新 24-17）と述べており、1930 年以降ルターを追う中で自らの哲学的思索を深めたように思われる²⁸。

先に見たように『無の自覚的限定』（1932）はキリスト教との対話の中で執筆された論文集であり、その後半は「永遠の今の自己限定」「自愛と他愛及び弁証法」「自由意志」「私と汝」と題された論文が続き、特に「永遠の今の自己限定」では神人のパラドクスとして時間が主題となる。その際西

田が注目するのが、オーファーベック（1837-1905）が用い、のちに弁証法神学の主要概念ともなる「原歴史」である。1931年2月2日の日記には「バルトのローマ書よみ始む」（新18-171）とあり、西田はドイツ神学界の動向をいち早く押さえ²⁹、最晩年まで弁証法神学に強い関心を示している³⁰。1932年には、西田の教え子で当時『読売新聞』宗教欄主筆であった逢坂元吉郎（1880-1945）の企画で若手神学者との座談会が実現した³¹。西田はこの座談会以降、特に信仰論と終末論の文脈でプロテスタント神学と対話を繰り返すが、その際大きな役割を果たすのがこの座談会に参加していた熊野義孝（1899-1981）である。

1933年4月28日逢坂に宛てた書簡を見ると「熊野氏の弁証法神学とはどういふものか」（新21-161）とあり、逢坂から熊野に連絡がいったのか、翌月5月7日には熊野に宛てて「御著 弁証法的神学概論 御恵贈下さいまして難有御座いました」（新21-162）と謹呈本の返礼をしている。同年12月8日に行われた講演では、「熊野義孝、牧師ですけれどもその人の書いた『弁証法的神学』と云ふ小さい書物ですがそれに却々要領よく書いてある」（新13-236）と述べている。遡る9月26日には「御高著 終末論と歴史哲学 御恵賜下さいまして難有御座いました 興味ある問題と存じその中拝読いたします」（新21-185）と返礼し、10月26日には、次のような書簡を送っている。

御恵与の終末論と歴史哲学を今夜大半拝読いたしました 大変に面白ひと存じます 自分が全く哲学的に考へて来た結果と非常に接近したものと存じます 私はこういふ考へを哲学的に基礎づけ様と思ひます³²。（新21-194）

西田はその日のうちに「今夜熊野君の終末論をよみ非常に面白かつた あの人は中々良いとおもひます」（同上）と逢坂に葉書を送り、更に翌日「外国にあゝいふ考の終末論をかいたものがあるのですか 終末論について読んで見たいとおもひますので どうか終末論に関する良書を御教示下

さいませ」（同上）と終末論について熊野に教えを請うている³³。1933年は熊野義孝の影響下で思索したと言っても過言ではないほど西田は熊野を評価し³⁴、またそれ以降も熊野を通してカール・ホルやプルンネルのカルヴァン研究を知り³⁵、1938年以降の諸論文「人間的存在」³⁶（1938）、「絶対矛盾的自己同一」（1939）、「予定調和としての宗教哲学へ」（1944）にその影響を見て取ることができる。

特に本稿で注目したいのは、西田が評価した熊野の思索（『終末論と歴史哲学』）が終末論の文脈でルターの信仰義認を問題にしている点である。「信仰による義は、狂信によって道德意識を覆うことではない。道德意識の極点にいたって、新しい世界の可能を開示するものにほかならない。……信仰による義の背後には、必然的に終末思想が横たわっている。最高善が終末論的な威力において人間に切迫するとき、そこに我々は信仰の倫理的必然性を感得するのである。したがって、このとき惹き起こされる悔い改めの意識は、決して過去への『悔い』でなくて将来への展望となる」³⁷という熊野の発言は、そのまま1934年8月に発表された「弁証法的一般者としての世界」の西田の言葉に呼応するところがある。

ルターはローマ書の序言に於て、信仰とは人々が之を以て信仰だと思ふやうな人間的な妄想や夢幻ではない、信仰は寧ろ我々の内に働く神の業である、ヨハネ伝にある如く、我々を更へて新しく神から生まれさせ、古いアダムを殺し、心も、精神も、念ひも、すべての力と共に我々を全く他の人となすことであると云つて居る。

絶対の否定の肯定に即して成立する我々の自己は、唯この世界が絶対否定の肯定として自己自身を限定するといふことを自覚することによつてのみ生きると云ふことができる。それが信仰である。故にルターの云ふ如く、信仰は妄想や夢幻ではなくして、我々の自己の存在理由である。……信仰は妄想や夢幻でな

いと共に単なる情操でもない。それは無限の活動でなければならない。……ルターは実に信仰については、生ける、勤勉な、活動的な力強いものであつて、従つて間断なく善を働かないといふことは不可能であると云つて居る（7-425ff、下線部引用者）

西田はこれ以降、最晩年に至るまで宗教の核心に迫る際に「聖パウロのローマ人に与えた手紙への序言」（以下「ロマ書序文」）を引用し³⁸、ルターの『奴隸意志論』、カール・ホルのルター研究を必死になって取り寄せ³⁹、それらは現在京都大学に西田文庫として所蔵されている⁴⁰。「絶対矛盾的自己同一」（1939）では、このようにして取り寄せたテキストを踏まえながら「ルターは基督者の自由を論じて、すべてのものの上に立つ自由な君主であつて、すべてのものに奉仕する従僕である」と云ふ。故に我々はこの世界の中に自己同一を置く我々の行為によつて宗教に入るのではなく、かゝる行為そのもの、自己そのものの自己矛盾を反省することによつて宗教に入るのである。而して我々が斯く自己自身の根柢において自己矛盾に撞着すると云ふも、自己自身によるのではなく絶対の呼声でなければならない。自己自身によつて自己否定はできない（ここに宗教家は恩寵というものを考へる）（9-216）と、徹底的な受動性として信仰を取り上げ、この受動性のうちに人間存在の自由と神の義としての恵みを問題にする。

2)「ロマ書序文」と石原謙

西田が本格的にルター神学と対話を始めたのは熊野義孝の影響によるが、熊野の『弁証法的神学概論』と『終末論と歴史哲学』には「ロマ書序文」に関する言及は見られない。それを踏まえれば「ロマ書序文」に注目するきっかけを与えたのは、熊野ではないと考えるべきであろう。西田がルターと接近した1933年は、石原謙（1882-1976）が岩波文庫に『基督者の自由 他三篇』として翻訳を公にした年でもある。この他三篇のうちに「聖パウロのローマ人に贈る書翰への序言」があり、

1934年に西田が「ロマ書序文」を引用していることを鑑みれば、西田がこの訳を読んだと思えなくもない。しかし、初版石原訳と西田の引用には相違があり⁴¹、西田がこの訳を見て「弁証法的一般者としての世界」を書いたとは考えにくい⁴²。西田がルター聖書を読んだ可能性は極めて低く、西田がどこから「ロマ書序文」に関心を持ちそれを引用するに至ったかが判然としない。しかも、書簡を見る限り石原謙に対する西田の評価は高くはなく、少なくとも1935年までは通り一遍のやり取りしかしていない⁴³。西田は1936年以降石原に二度書簡で質問しているが、ルターに関してのものではない。石原の論争相手であった佐藤繁彦の博士論文を指導したのは西田と同僚であった波多野精一であるため、佐藤との影響関係も考えられなくはない。事実、佐藤は1933年に『ローマ書講解に現れしルターの根本思想』を京都大学に提出し、文学博士となっている。とはいえ、佐藤繁彦に関する言及は西田の日記の備忘録に二箇所名前と住所が載っているのみ⁴⁴で、佐藤との関係も考えがたい。

以上を踏まえて再度議論に立ち返るならば、石原謙が『基督者の自由』の翻訳を公にする以前、すでに佐藤繁彦は自費出版で『基督者の自由』の訳出を数回試みている。佐藤は1933年に石原訳が出るや否や雑誌『ルター研究』で石原を批判し、1934年初めには『基督者の自由とその研究』を記して再度批判している。石原はこうした批判を受け入れ、同年5月25日に岩波文庫から全面改訂第二版を出版した。徳善は「この論争は、当時、波多野精一が両者の調停に立ったほど激しかったようである」⁴⁵と述べているが、波多野を通して西田がこの論争を知っていたかは分からない。

石原訳第二版を見てみると、『基督者の自由』のみならず「ロマ書序文」の言葉遣いにも改変が加えられていることに気づかされる。さらに、西田の引用箇所を目を移すと、その表記が西田の引用表記と同様であることに驚かされる⁴⁶。すでに見たように、1935年までは石原謙に強い関心を

示すことがなかったにも関わらず、1936年には旧約に関する良書、1938年にはカルヴァンに関する良書を石原に問い合わせしており⁴⁷、こうした西田の態度の変化を見れば、「ロマ書序文」そのものを西田が知るの、石原謙の第二版改訂『基督者の自由』を通してだと言えるだろう⁴⁸。第二版改訂が出るのが1934年5月25日、「弁証法的な一般者としての世界」のルターの引用部分が発表されるのは8月である。それを考え併せると、西田は石原の改訂訳を見てすぐに「ロマ書序文」を引用したということになる。

おわりに

本稿では、主に資料研究を中心としながら西田哲学におけるルター受容の過程を追ってきた。日本におけるルター受容の過程と同様に、最初期は歴史的偉人として西田もルターを取り上げていたが、西田自身の哲学的深まりと呼応するように、西田はドイツ神秘主義の文脈のみならず、人間存在の根本理由を解明するためにルター神学と格闘するようになる。その際、西田に影響を与えたのは熊野義孝であることは間違いないが、西田が最晩年まで引用する「ロマ書序文」は石原謙の第二版改訂訳からのものであった。西田がルターに関心をもつきっかけとなったのは、シェラーの著書に掲げられたルターの「死の自覚」であったように思われる。それは言い換えれば、「生は何処より来り死は何処へ去るのであるか、人は何の為に生き何の為に働き何の為に死するのであるか」(新11-72)という「人心の疑惑」を西田が哲学の課題として引き受ける中で、ルターとの対話が必然的に行われたということであろう。信仰を「自己の存在理由」と語る西田は、絶対者の呼び声に生きるものとして信仰と自由の問題を明るみに出そうとするが、その詳細を明らかにすることは今後の課題としたい。

注

1 西田幾多郎の著作の引用および参照は、下村寅太郎他編『西田幾多郎全集』(全19巻)、岩波書店、

- 1965-66年(第二版)、また著作以外に関しては、竹田篤司、クラウス・リーゼンフーパー、小坂国継、藤田正勝編『新版 西田幾多郎全集』(全24巻)、岩波書店、2002-2009年に基づく。引用と参照に関しては、たとえば第6巻1頁の場合は(6-1)のように、本文中に典拠箇所巻数と頁数を示し、新版全集からの引用は旧版全集と区別するため巻数の前に〈新〉と付して、本文中に典拠箇所巻数と頁数を示す。
- 2 西田哲学とルター神学の親和性に言及する限られた論文として、武藤一雄「西田哲学とキリスト教」『西田哲学を語る——西田幾多郎没後50周年記念講演集』1995年、133-154頁がある。
 - 3 西田が金田良吉(後に山本姓となる)に出会うのは、石川県専門学校附属初等中学第二級(第三学年)に補欠入学した1886年9月である。鈴木大拙や藤岡作太郎(東甫)との出会いもこの補欠入学時であるが、山本良吉、鈴木大拙、藤岡作太郎は西田を公私ともに支える存在となる。書簡集を開けば初期の書簡のほとんどが山本良吉に宛てられた書簡であることに気づく。山本は教育者として活躍し、1936年には武蔵高等学校の第三代校長に就任している。
 - 4 立山忠弘「求道の歩み」、金子晴勇・江口再起編『ルターを学ぶ人のために』世界思想社、2008年、19-20頁。石居正己『ルターと死の問題——死への備えと新しい命』LITHON、14頁。
 - 5 徳善義和「日本におけるルター研究」『日本の神学』第6号、1967年、76頁。
 - 6 徳善は前掲論文において『同人社芸雑誌』と表記しているが、誤植だと思われる。
 - 7 徳善義和、前掲論文、76頁。
 - 8 熊野義孝は「改革者ルターの名をいつ覚えたかと問われた時、わが国のキリスト者はもとより、それ以外の人々もおそらく答えに窮するであろう。この人の名は〈いつの間にか〉自分の耳に熟したと言うほかはないのである」(前掲論文、500頁)。
 - 9 平林広人「敬字中村正直とルター」『神学季刊』第4号、日本ルーテル神学校、1958年、2頁。
 - 10 「近世の始に当り宗教の勢力漸く衰へ加ふるにLutherの大改革ありて耶蘇教其統一を失ひ、之に伴ふ懷疑的精神は遂に帝王の権利君民の義務をも疑ふに至り、人事界又一のregulative principleなく凡て混乱の状況となれり」(『英国倫理学史』新14-380)。
 - 11 西田は『善の研究』序で「この書を『善の研究』と名づけた訳は、哲学的研究がその前半を占め居るにも拘らず、人生の問題が中心であり、終結であると考えた故である」(1-4)と語っている。

- 12 1902-1904年頃のノートと推定される断章(新16-728)でも、1904-1905年頃と推定される『善の研究』素案「倫理学草案」でもルターのヴォルムス国会が取り上げられ、「倫理学草案」では「吾人を絶対的に満足せしむる善は……吾人の理性を満足せしむる者でなくてはならぬ。……此の理性的欲求を満し得れば……ルーテルがウォームの会議に立つたる如き確信を生ずるのである」(新14-561)と記されている。
- 13 ベーダ『英国国教会史』第2巻10の説話(*The old English version of Bede's Ecclesiastical history of the English people*, ed. by Thomas Miller[In parentheses Publications. Old English Series. Cambridge, Ontario 1999]. P.63.)邦訳に高橋博訳『ベーダ英国国教会史』(講談社学術文庫1862)2008年、100頁。ベーダ『英国国教会史』は英国史研究では必読書であり、また高橋博はこの箇所を「有名な雀の比喩」(341頁)と言及しているが、西田が影響を受けた具体的な典拠は定かではない。当該部分の特定に関しては、阿部善彦氏(立教大学)の助力を得た。
- 14 『無の自覚的限定』(1932)所収「場所の自己限定としての意識作用」では、「哲学は我々の自己の自己矛盾の事実より始まるのである。哲学の動機は『驚き』ではなくして深い人生の悲哀でなければならない」(6-116)という言葉で論文が結ばれる。
- 15 「死の自覚」の問題に関しては、拙稿「〈永遠の今〉と死の自覚」『哲学論集』第46号、上智大学哲学会、2017年、67-78頁を参照されたい。
- 16 「回顧すれば、余の十四歳の頃であった、余は幼時最も親しかった余の姉を失うたことがある、余はその時生来始めて死別のいかに悲しきかを知った。余は亡姉を思うの情に堪えず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き処に到りて、思うままに泣いた」(『国文学史講話』の序)(1-415)。
- 17 左右田喜一郎「西田哲学の方法について」、『哲学研究』第127号、1926年(藤田正勝編『西田哲学選集』別巻2、燈影社、1998年、44-65頁所収)。『左右田喜一郎全集』第4巻、岩波書店、1930年、501-530頁。
- 18 西田とキリスト教の接触に関しては、もう少し前に遡って考えることが可能である。というのも、1897年西田27歳の時、山本良吉に宛てた書簡の中で、「今余か肉体上死するとすれば第一に余か念頭に浮ふことは父母妻子のことならん 余は誠に此間に洒々落々たる能はざるなり 唯近頃マタイ伝第六章の神は時かす取めず蓄へざる鳥も之を養ふとき、て少しく心を安んじうるなり 君も御存知の如くバイブルは実に吾人か心を慰むるものなり 余はとうしても論語の上にあると思ふか貴説いか、」(新19-47)と語っているからである。この告白は、西田とキリスト教の対話を『善の研究』以前に遡って考えることを可能とする以上に、西田が単なる学問的な関心ではなく、自らの生に喘ぎ駆けずり回る渇きの感覚を持ってキリスト教と向き合い、聖書を読んだその証左でもある。
- 19 小川圭治「西田哲学とキリスト教」、上田閑照編『西田哲学への問い』、岩波書店、1990年、251頁。
- 20 1910年前後にメモされたと思われる断片においてルターの名前を挙げて神人の関係についてメモを残し(新16-197)、また1911年頃と推定される「哲学概論」講義ノートでも、真の宗教との関わりからルターが二度強調される形で引かれている(新15-25)。
- 21 ドイツでは20世紀初頭から始まるカール・ホルのルター研究がルター学として新しい展開を見せ、バルトの『ローマ書講解』(1919)と共にルター研究は一層華やいだ。こうした経緯に触れる論文に、徳善義和「日本におけるルター研究」76頁、徳善義和「研究史」(金子晴勇・江口再起編『ルターを学ぶ人のために』世界思想社、2008年)243-244頁、江口再起「20世紀のルター像」(『テオロギア・ディアコニア』第35号、2002年)24-27頁がある。ルター・ルネサンスを導いたのは、ルター生誕400年を記念して刊行が始められたワイマール版ルター全集(D. Martin Luthers Werke. Kritische Gesamtausgabe, "Weimarer Ausgabe", 1883)や、トレレルチによる宗教改革やルター研究、20世紀初頭にかけて発見された初期ルターの聖書講義学生筆記、また『第1回詩編講義』『ローマ書講義』のルターの自筆原稿発見に伴う、ホルによる厳密な読解研究だと考えられる。西田も1930年代後半にカール・ホルの書籍を求めており、現在でもKarl Holl, *Was verstand Luther unter Religion?*, Tübingen: J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1917. が西田文庫として京都大学に所蔵されている。
- 22 詳細な研究として、阿部善彦「日本におけるドイツ神秘思想の歴史」『思想史研究』第13号、2011年pp.161-172がある。
- 23 書簡におけるルターの死生観を問題としたものに、中谷博幸「マルティン・ルターと死者の『死』(2)」(『香川大学教育学部研究報告 第一部』124巻、香川大学教育学部、2005年、13-26頁)がある(特に13-18頁参照)。中谷は、ルターが肉親を失った友人に対して、娘の死に言及しつつ「霊において」喜ぶべきものが、「肉において」悲しいという言及を行なっていること(WA Br.10, pp.149-150, Nr.3794やWA Br.11, p.114, Nr.4122.)に注目して

- いる。
- 24 Vgl. Max Scheler, *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik : neuer Versuch der Grundlegung eines ethischen Personalismus*, ; herausgegeben von Christian Bermes ; unter Mitarbeit von Annika Hand (Philosophische Bibliothek, Bd. 657) , F. Meiner, 2014. S. 410.
- 25 シェーラは注 408 において次のような表記をしている。Vgl. Martin Luther, *Der Tod*(1542), in: ders., *Werke. Kritische Gesamtausgabe. Tischreden*, Bd. V, Weimar 1919. S.191: »Ich bin ja fröhlich im Geist, aber nach dem Fleisch bin ich sehr traurig; das Fleisch will nicht heran, das Scheiden verirrt einen über die Maße sehr. Wunderding ist's, wissen daß sie gewiß im Friede und ihr wohl ist, und doch noch so traurig seyn!« 「geboren」の誤記の可能性及び引用の典拠に関しては、阿部善彦氏（立教大学）の助力を得た。
- 26 Max Schelers, *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik : neuer Versuch der Grundlegung eines ethischen Personalismus*, Halle a.d.S. : M. Niemeyer, 1927. 京都大学所蔵の同書を調査したところ、注 408 の部分に直接書き込みがなされていたわけではないが、西田の蔵書印が押された同書同箇所を西田が目にした可能性が極めて高いと言えるだろう。
- 27 当時読売新聞の社長となっていたのは、西田が四高時代に教えていた正力松太郎である。彼の先輩で、同じく石川県尋常中学校七尾分校、四高時代に西田の教え子である逢坂元吉郎が1929年3月以降、現役牧師でありながら『読売新聞』の記者となり宗教欄の筆筆となった。こうした事情から、1930年代以降、西田は読売新聞の宗教欄にしばしば登場している。
- 28 石川県西田幾多郎記念哲学館の助力を得て、日記の当該箇所を目を通す機会を得た。西田直筆の日記を見ると、日記翻刻の段階で誤記が生じたのではなく、西田自身が「geboren」と表記していることが分かった。とはいえ、その場合、なぜ西田が1930年の日記表紙裏にわざわざルターの言葉を掲げたのか、その意図がばやけてしまう。事実、新版全集には和訳が付されているが、次のような内容である。「娘マグダレネが生まれたとき、ルター曰く、『私は霊に於いてはむしろ嬉しい。しかし肉に従えば、すこぶる悲しい。確かに女兒は平和と好調の裡にあるのに、それでもなお、かくも悲しいとは、なんたる不思議か』」。多くの肉親の死を経験し、また自身の哲学的課題を「死の自覚」から問題にしてきた西田の哲学的関心を鑑みるならば、シェーラーの『倫理学における形式主義と実質的倫理学』注408を書き写す際に、西田が誤って「gestorben」を「geboren」と表記したと考える方が自然である。
- 29 小川圭治は西田がこうしたドイツ神学界の動向を知りえたのは、ドイツに留学していた三木清によると推測している（小川圭治「西田哲学とキリスト教」、276-277頁）。「原歴史」と西田との関係を最初に指摘したのは小川であり、浅見は小川の研究を受けて自らの思索を展開させている（浅見洋『西田幾多郎とキリスト教の対話』、76頁）。
- 30 西田は英文学者石田憲次（1887-1971）の謹呈本『基督教的文学観』への返礼の書簡（1932年6月19日）においても、弁証法神学について言及しているが、ここではルターよりもカルヴァンとの親近性を指摘しており、西田がルターやカルヴァンとの関係も含めて弁証法神学を追っていたことがわかる（新21-108）。
- 31 この座談会には弁証法神学に深く傾倒した組織神学者の熊野義孝（1899-1981）や桑田秀延（1895-1975）、聖書学者の村田四郎（1887-1971）が参加している。いずれも『無の自覚的限定』（1932年12月）が出版される1932年を中心に「西田博士に聴く座談会」は6月21日から25日、「第二回座談会 西田博士に聴く」は7月14日から20日にかけて紙面に登場した。桑田は座談会を振り返り、バルトよりも西田とキルケゴールの親近性を指摘し、また悪の問題が真剣に問われない限り、西田の人格論は哲学的一般性を越え出るものとならないと指摘している。とはいえ、西田の議論がキリスト教に接近していることを認めないわけではない。「博士の語られたところと吾等の信仰の立場との間には諸種の接触があるやうに思ふ。〈人格〉に就て語られる点、〈絶対他者〉とその〈呼びかけ〉に就いて語ると云はれる点、汎神論ではなく人格神論に近づいてゐると云はれる点、具体的でないやうに思われるが兎に角罪に就て語り、愛（アガペー）について語られる点等がそれである」（桑田秀延「西田博士に聴いて」、『読売新聞』1932年6月25日）。座談会に参加していた熊野や村田も似たような感想を述べており（熊野義孝「西田博士と我等——プロテスタントの再認識のために」、『読売新聞』1932年6月28日、村田四郎「哲学から宗教へ——座談会の所感」、『読売新聞』1932年6月29日）、西田はこうした批判に応える形で、『無の自覚的限定』以降の宗教論を構築してゆくことになる。
- 32 熊野の『キリスト論の根本問題』（1934）の謹呈に対しても、1935年2月11日「拝呈 御高著京都から廻送して参りました 難有御礼申上ます ケノ

- ーシス論など面白いと存じます 私もオントロジーの上からは『無の限定』といひますが 御考の如きことを考へないのではありませぬ 唯いつまでも論理の問題が片つかないで困ります」(新21-282)と書簡を送り、西田はケノーシス論にも強い関心を示している。
- 33 西田は熊野に対して、1933年11月19日「Zwischen den Zeiten」お見せ下さいまして難有御座いました早速拝読いたしますから四五日御願いたします」(新21-194)と葉書を送り、6日後の11月25日には「大変面白く拝読いたしました 如仰論理的には不十分とおもひますが 又どうか面白いものがあらはお願いいたします」(同上)と感想を送っている。“Zwischen den Zeiten”は、ブルトマンやバルト、ゴーガルテンが参加した機関誌(1922-33)を指していると思われる。
- 34 1933年12月7日、西田は石田憲次に対しても「先日熊野義孝氏『終末論と歴史哲学』といふ書をかきました 終末論の考は一寸面白くもおもひます」(新21-201)と熊野を評価する葉書を送っている。
- 35 また、1938年1月3日「Calvinの宗教思想について書いたものに何か良書が御座いませぬか」(新22-98)と熊野に問い合わせ、熊野の返事に対して1月11日に二通「Calvinの事につき御尋ね申上げました延委細御教示下され誠に難有御礼申上げます Leibnizの考へCalvinに負ふ所あるを知り Calvinの事を調べてみようと思ひ立つたので御座います」 「Hollのものが京都に御座いましたので早速一読いたしました これは面白くもおもひます これらは別冊の小冊子が御座いますのでせうか 一寸葉書にて御知らせお願いします」(新22-100)、更に1月15日「早速御返事下され且つブルンネルのカルヴィン御送り下され御厚情深く御礼申上げます」(新22-104)、1月21日「ブルンネルのカルヴィン本日御返却申上げました 誠に難有御座いました厚く御礼申上げます」と西田は何度も熊野に連絡を取り、それに対して熊野は迅速に対応している。
- 36 「近世の資本主義はカルヴィン主義から由来したと云はれる。中世宗教の神の人間化に反対して、すべてのものを超越的の神に帰したカルヴィン主義に於て、我々に残されたものは唯孤独の自己であつた。而も(ルターと異なつて)神との内的合一をも否定した時、抽象的合理主義が成立するの外なかつた。神と人間との関係が情意化せられるを恐れて、合理的に制度化せられるに至つたと思ふ」(9-65)
- 37 熊野『終末論と歴史哲学』(『熊野義孝全集』第5巻、新教出版社、1982年、158頁。
- 38 「予定調和を手引として宗教哲学へ」でも、「信と云ひ、悟と云ふも、絶対矛盾的自己同一者の自己限定として、我々の生命の根本的転換を意味するものでなければならない。信と云つても、人の考へる如き主観的信念ではない。ルターは云ふ(ローマ書への序言)。信仰は、人々がこれを以て信仰だと思ふやうな、人間的な妄想や夢幻ではない。寧ろ信仰は、我々の内に働き給ふ神の業であり、我々を更へて新しく神から生れさせ、古いアダムを殺し、我々を全く他の人となし、更に聖霊を伴ひ来たらすことであると」(11-140f.)と「ロマ書序文」を引いている。また、「場所的論理と宗教的世界観」においても「ルターも、ローマ書の序言に於て、信仰は我々の内に働き給ふ神の業なり、ヨハネ伝第一章にある様に我々を更へて新しく神から生まれさせ、古いアダムを殺し、心も精神も念ひも凡ての力と共に、我々を全く他の人となし、更に聖霊を伴ひ来らすと云つて居る」(11-424)と同様の引用を繰り返している。
- 39 1936年11月27日西谷啓治宛書簡「Kattenbusch, Luthers Lehre von unfreiem Willen, 2. Aufl. 1905 Engelland, Gott und Mensch bei Calvin, 1934といふものも若し気があらば 無論皆僅のものと思ふが」(新21-415)、1936年12月31日付日記予記「Kattenbusch Luthers Willensfreiheit」(新18-260)、1937年8月9日ドイツ留学中の西谷啓治宛書簡「君の出立の少し前お願いした Kattenbuschの『ルテルの自由意志論』も服部君の話によれば未だ来ない由これもそんなにないものでせうか」(新22-54)、1938年1月17日「福本へ Holl, Luther/ Niesel, Calvin」(新18-282)。
- 40 西田文庫にはルターの著作として *Vom unfreien Willen*, nach der Übers. von Justus Jonas hrg. u. m. Nachwort vers. von Friedrich Gogarten. Münch., C. Kaiser, 1924. *Von der Freiheit eines Christenmenschen*, nebst zwei anderen Reformationsschriften aus dem Jahre 1520; Bearb., mit Einleit. u. Anmerk. vers. von Karl Pannier 2. Aufl. mit einer Einführung von J.B. Schairer, Lpz., P. Reclam, 1937. *An den christlichen Adel deutscher Nation*, von des christlichen Standes Besserung. Bearb., mit Einleit. u. Anmerk. vers. von Karl Pannier, Lpz., P. Reclam, 1881.がある。また、カール・ホルのルター研究として Karl Holl, *Was verstand Luther unter Religion?*, Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), 1917.がある。
- 41 「『信仰』は、動もすると人々がこれを以て信仰だと思ふやうな人間的な幻想や夢ではない。……寧ろ信仰は我々の内に働き給ふ神の業であり、ヨハネ伝第一章にあるやうに我々を變へて新しく神か

- ら生れさせ、古いアダムを殺し、心も精神も想念も凡ての力を共に我々を全く他の人となし、更に聖霊をも伴ひ来らすのである。實に信仰については、活ける、働く、能動的な、力強いものであつて、従つてそれが善を絶え間なく働かないといふことは不可能である」(石原謙訳『基督者の自由 他三篇』岩波文庫、1933年、86頁)。
- 42 なお、石原謙は初版から改訳を重ねており、『キリスト者の自由』のみならず「ロマ書序文」に関しても、初版と1955年版『新訳 キリスト者の自由』とは言葉遣いに相違が見られる。「さて『信仰』は、ある人々が信仰だと考えているような人間的な妄想や夢ではない。……しかし信仰はわれわれの内に働きたもう神の御業であり、ヨハネ伝福音書第一章にあるようにわれわれをかへて新しく神から生まれさせ(13節)、古いアダムを殺し、心も精神も念ひもすべての力も、われわれをまったく別人となし、更に聖霊をも伴いきたらしめるのである。これ實に信仰についての生ける活発な活動的な力強いものであつて、それが絶え間なく善を働きださないとすることはありえない」(石原謙訳『基督者の自由』第二刷改訂、岩波文庫、1934年、86頁)。
- 43 西田はむしろ石原謙の兄であり物理学者の石原純を高く評価していた。1931年10月15日岩波茂雄宛書簡「今月の雑誌『科学』に石原君のHeisenbergについて書かれたものを見ました さすかにあの人はideaをよく掴んで居られると思ふどうか同君はあゝいふもの持つと委しく書いてくれられまいか 一冊の小冊子としてでも」(新21-54)とあり、また原阿佐緒との不倫により東北大学を追われた際にも「石原君の事誠に意外の事にて御同様に惜みても余りある事と存じ候 併し又相当の時機に於て必ず又立たるゝ事と信し居候」(新20-18)1921年9月21日付桑木彥雄宛書簡で述べている。
- 44 1915年日記備忘録「佐藤繁彦／土屋町下長町上ル」(新18-37)、1916年日記備忘録「佐藤繁彦／兵庫県武庫郡鳴尾村ノ内西畑」。
- 45 徳善義和『キリスト者の自由——訳と注解』、教文館、2011年、82頁。
- 46 「『信仰』は、人々がこれを以て信仰だと思ふやうな人間的な妄想や夢幻ではない。……寧ろ信仰は我々の内に働き給ふ神の業であり、ヨハネ傳第一章にあるやうに我々を更へて新しく神から生まれさせ、古いアダムを殺し、心も精神も念ひも凡ての力と共に我々を全く他の人となし、更に聖霊を伴ひ来らすのである。實に信仰については、生ける、勤勉な、活動的な、力強いものであつて、従つてそれが善を働かないといふことは不可能である」(石原謙訳『基督者の自由』第二刷改訂、岩波文庫、1934年、86頁)。
- 47 1936年5月1日石原謙宛書簡「Eichrodt, Theologie des alten Testamentsといふ書はどういふ書ですか 私は旧約の思想を知りたいと思ふのですがさういふ方に良書でせうか それから Volz, Mose und sein Werkといふ書はモーゼの事を知るによるしきものですか 何か旧約の宗教思想を深いアインジヒトを以つて書いたものがないでせうか」(新21-385)、1938年1月19日石原謙宛書簡「カルヴィンにつき御手紙の事お願申上げました処委細御教示下され難有御座いました 厚く御礼申上げます ライプニッツの单子論がカルヴィンの思想に関係ある所から俄に調べて見度なつたので御座います」(新22-104)。
- 48 事実、京大に所蔵されている西田の蔵書 *Vom unfreien Willen* と *Von der Freiheit eines Christenmenschen* を見ると、*Vom unfreien Willen* には西田の筆跡と思われる書き込みがあるのに対して、*Von der Freiheit eines Christenmenschen* には書き込みがない。書き込みがないだけでなく、西田が実際に読んだとは思えないほどきれいである。おそらくこれも、西田が石原謙訳『基督者の自由』第二版改訂訳を読んでいたことの証左となると思われる。西田は *Von der Freiheit eines Christenmenschen* を手に入れようと努力はしたが、あくまでも翻訳の参照として使用したということだと考えられる。

Kitaro Nishida and Martin Luther — From “Awareness of Death” to the Possibility of Freedom —

Samoa Ishii

For Nishida, who regarded the inquiring of the self as a basic problem of philosophy, the theory of religion was a central problem of his philosophy. After 1935, Nishida selected Luther as a partner for critical dialog to develop his own theory of religion. The deeper his interest in Luther became, the more profound his own theory of religion became. However, the relationship between Nishida and Luther has never been adequately studied. To address this gap, I will demonstrate the fact of Nishida’s reception of Luther, based on the various documents in this article. The final aim of this article is to show how Nishida pursued the problem of death through dialog with Luther and to inquire about the possibilities of human freedom by interpreting Luther’s eschatology from the viewpoint of self-awareness of death.

Keywords: Nishida’s philosophy, Martin Luther, Yoshitaka Kumano, awareness of death, freedom